

記者の目から見た日本のバスケット



正田裕生氏
共同通信社記者

「バスケットの指導者って、なにを目標にやっているの？幼稚じゃない？」な、なに！？。聞き捨てならない。バスケットボールの担当記者として、ましてや高校生の時に多少バスケットに関わった者としては、真意を聞かすにはいられない。

テニスの強化に携わっているその人は、こう言った。「テニスのコーチは、無理かもしれないと思いながらも世界のナンバーワン選手を育てようと必死になっている。バスケットにはそれが見られない。テレビで試合を見ていても、何のためにやっているのかまったく分からない。本当につまらない」。こんな主旨の話をしていた。

これにも反論せずにはいられない。バスケット界のどれだけのコーチが本場米国へ行ってフォーメーションや指導法などを学んだり、人脈を築いていることか。コート上で理想のバスケットを実現させるために、どれだけの時間と労力を割いていることか・・・。

ただ、正直に言って、この人の意見にうなずける面もある。他の競技とも比べてみて「つまらない」と思える部分があるのは、日本のバスケットの、そして日本のスポーツ文化の閉塞感を表しているようにも思える。

「能代のバスケットをやっていては、卒業後、選手は通用しない」。バスケットの指導者からこんな見解を聞くことがよくある。当然、異論も多いだろう。

ここで能代工が打ち立ててきた偉業を否定するつもりなど毛頭ないし、私にそんな資格もない。ただ、高校時代にひたすらに走るバスケットを追及し、チームとして強い集団をつくってインターハイや全国高校選抜優勝大会に優勝するのと、NBAに通用する選手を育て上げることとは違うだろう。「結局、指導者はチームとして結果を残さなければならない。だから、個人技を高めるより“勝てるバスケットをしよう”とする。そうすると選手個人の可能性は伸ばせない」。こんな言葉を口にするバスケット関係者もいる。

「夢」が見当たらないのだ。バスケットボールをやっている子供たち、指導している大人たちがNBAでプレーすることを本気で目指しているだろうか。NBAで通用するために、何が何でも何を伸ばさなければならないかを考え、高い個人技を身に着けようとしている選手や指導者がどれだけいるだろうか。そうでなくても、日本をオリンピックへ導ける選手をつくろう、という高い意識をもって、どれだけのコーチが指導しているだろうか。

田臥勇太がデンバー・ナゲッツと契約した。現在（10月初め）はまだチームに残っている。田臥の実力で決してNBAで通用するとは、私自身思っていない。

NBAではビジネスが絡み“商品価値”も必要だ。むしろ「絶対無理」と見る関係者が多い。

開幕の登録選手に残れる可能性はわずかだろう。しかし、少なくとも、田臥の挑戦には夢がある。高校時代に3年連続で全国大会3冠。プリガムヤング大ハワイへの留学。派手なプレーに加え、173cmの小柄な体ながらスピードで勝負する「格好良さ」は、まさしく「スター選手」だ。だから、様々な人がサポートし、日本選手初の「おとぎ話」に乗ってくる。少なくとも、プレシーズンマッチでトップ選手と相まみえるシーンがあるかもしれない。それだけで、胸がわくわくするファンも多いはずだ。

田臥は、日本バスケットの復興の切り札だったは

ず。実力はともかく、最も客を呼べる選手であったことは間違いない。昨季、トヨタ自動車に入団し、多くのファンを会場に呼んだのも事実だ。1976年モントリオール大会を最後に五輪出場がなく、企業の休廃部で停滞するムードを打破できる最後で最高のカードだったのではないか。その田臥は、わずか1シーズンで日本のトップ・リーグを去ってしまった。それほど、日本のスーパーリーグには魅力がなかったのだ。内容のなさや選手の意識の低さに「見て損をした」と思う試合もある。それだけでなく、リーグ自体が将来発展していく希望を提示していない。自国の人気ナンバーワン選手でリーグを再生させることができなかった。寂しいというほかない。「せっかくのチャンスだったのに、日本のバスケット界として田臥を引き留めることができなかったのか。せっかく盛り上がってきたのに」という、ある監督の言葉に共感する人が多かったと思う。

田臥に“振られた”日本のバスケット界に、打開策があるのか。ここ何年か、「プロリーグ化」という構想がくすぶっている。しかし、スーパーリーグのチームを所有する企業にとって「プロ」は禁句といわれて久しい。「もうからない。赤字で運営できない」という発想しか浮かんでこないからだ。そもそも「プロリーグ」という言葉の意味を本当に理解しているバスケット界の人間がどれだけいるかも疑わしい。それほど、これまでの議論は稚拙だった。「プロ」という発展的な形態より、企業は生き残りで必死だ。いつ休部になるか分からない危機感がある。チーム名を挙げて「〇〇はあぶない」などとささやかれることも多い。地域に根を張って行政や市民を巻き込んだ形のクラブ化を模索している企業も多い。多くの人の努力がありながら、ことは簡単に好転しない。田臥が去って行ったのも無理もないかもしれない。今年の冬季アジア大会を最後に、日本で国際総合大会が開かれる予定はない。五輪開催地に名乗りを上げる自治体もない。日本のスポーツ界自体に夢が見つげにくくなっている。

この閉塞感を打開するのに、日本協会の責任は大きい。選手の一貫指導を含め、高い個人技を磨いて世界へ送り出す強化策や態勢の充実が求められる。そして、2006年、さいたま市などでの世界選手権へ向けて日本を強化しPRを含めて人気度を上げることが課題だ。今回の男子アジア選手権で6位に終わったものの、大幅に若手に切り替えたチームは成長の芽を見せた。パブリセピッチ氏(クロアチア)という外国人監督を登用し、大鈍(ナタ)を振ったよい面が出た。

女子は1月、仙台でのアジア選手権で五輪出場権を獲得することが責務だ。企業にとっては、抱えるチームの競技が五輪に出場できるかどうかで処遇が大きく変わってくるからだ。

競技人口の多さ、競技としての面白さと人気の高さ。日本のバスケット界の現状は、この競技が持つ本来の魅力とはかけ離れている。

学閥、派閥、責任のなすり合い……。つまらない抗争は、見たくない。時間がかかっても、殻を破った新しい姿に生まれ変わる日があるのを望んでいる。